



日本児童文学学会奨励賞・特別賞

去る二〇二三年十月、センター研究員の小林夏美さんが第四七回日本児童文学学会奨励賞を、本学教授で本センター所長の浅岡靖央先生が第四七回日本児童文学学会特別賞を受賞されました。

小林夏美さんの受賞事由となった『「語る子ども」としてのヤングアダルト：現代日本児童文学におけるヤングアダルト文学のもつ可能性』（風間書房、二〇二三年）は、二〇二〇年度に学位授与された博士論文がもとになっています。

本書では、一九九〇年代から二〇〇〇年代にかけてのヤングアダルト文学の読者層であり、作品の中心人物の年代でもあるティーンエイジャー（ヤングアダルト）を「語る子ども」と位置づけ、理論的に検討した上で、梨木果歩『西の魔女が死んだ』、岩瀬成子『もうちょっとだけ子どもでいよう』、梨屋アリエ『スリスターズ』、いしいしんじ『麦ふみクーツェ』の四作品を、独自の視点で読み解きます。

また、本書の「あとがき」には、この研究に繋がる原体験が語られています。それによると、中学生の頃、いつも通っていた公共図書館の児童書コーナーで、それまで児童文学作品と区別せずに読んでいた作品がある日を境に「YA（ヤングアダルト文学）」に分類され、「その切り分けに覚えた納得と違和感」（二九二ページ）が、その後も持続する強い衝撃となり、「語る子ども」という視点で研究を進めていく下地をつくっていったそうです。ヤングアダルト文学研究に一石

を投じる意義深い一冊ですが、その源には、意外にも身近な図書館での出来事があったようです。

小林さんの著書につきまして、二〇二四年三月発行の『児童文学研究』第五六号に奥山恵先生（本学非常勤講師）による書評が掲載されています。奥山先生のご研究は本書の先行研究のひとつとして挙げられており、先行する研究者が新しい研究者の著書を読み解くこの書評もまた、ヤングアダルト文学研究史のひとつであるということ強く印象づけられました。

浅岡靖央先生の受賞事由となった『日本少国民文化協会 資料集大成』（金沢文圃閣、二〇二二〜二三年）は、全八巻と別巻から成る大著です。

日本少国民文化協会は、太平洋戦争開戦直後の一九四一年十二月二三日に創立され、敗戦までおよそ三年八カ月の間、国家による児童文化の一元的統制を目的に活動しました。日本少国民文化協会の関連資料は、滑川道夫監修のもと、『少国民文化』（全八巻、エムティ出版、一九九一年）に復刻されていますが、『日本少国民文化協会 資料集大成』では、その後、新たに発見された資料、特に、未公刊だった内部資料を収録することで、日本少国民文化協会の活動全体を、より詳しく、時系列に沿って検証することが可能になりました。私たちの今後の調査・研究活動に大きく貢献する資料集です。

この資料集の中身を見てみると、ところどころに書き込みがなされた印刷物や、手書きの調査資料、また、金銭の動きが分かる決算書など、収録された資料の種類は様々ですが、ざっと眺めてみただけでも非常に生々しい印象を受けます。第一巻には附録として三種の「愛国いろはかるた」が収録されています。いづれも一九四三年十二月に発行されたもので、お正月の

子どもたちに、このかるたで遊ばせることを意図していたのだということが分かります。当時の日本の政策を反映したスローガンを語呂の良い文言にのせて覚えさせようとしたことに加え、日の丸とともに描かれる南国風の植物といった絵柄によって、政策のイメージが刷り込まれていったことが見て取れます。

浅岡靖央先生、小林夏美さん、受賞おめでとうございます。

センター主催講演会報告

二〇二三年度は、第六九回研究会といたしまして、ドイツ文学、比較文学、観光学を専門とされる小林将輝氏をお招きし、言語学者で北欧文学者、翻訳家でもあった矢崎源九郎（一九二一〜一九六七）の業績とその翻訳の特徴についてお話いただきました。

第六九回研究会

小林将輝先生講演会

講演者	小林将輝氏（駿河台大学准教授、元本学非常勤講師）
題目	矢崎源九郎と児童文学―言語学者としての翻訳者―
日時	二〇二三年七月八日（土） 十三時〜十五時
会場	白百合女子大学 九〇二教室
司会	酒井志麻氏（本学助教）

四五歳と若くして亡くなった矢崎ですが、二〇〇年ほどの研究者生活のなかで一〇〇を超える著作物を残しています。翻訳では、とりわけ児童文学作品を数多く手がけていました。

講演会では、スクリーンに映し出される児童書の書影を確認しながらお話を聴くなかで、「原語主義」と「美しい日本語」というキーワードを通じ、矢崎の翻訳を支える考え方を知ることができました。

まず、ひとつめのキーワード「原語主義」についてですが、十カ国語以上の言語を扱う言語学者であった矢崎は、翻訳に際し、「原語主義」という方針を採っていたとのことです。マイナーな言語と見なされることのある北欧語でも、英語やドイツ語などの翻訳書から重訳するのではなく、作品が書かれた本来の言語から、直接、日本語に訳すことを重視していました。

ふたつめのキーワード「美しい日本語」は、日本語表現としての自然さを重視する、矢崎の考え方を示すものでした。矢崎は直訳調の生硬な表現を避け、日本語表現として自然に受け取ることのできる翻訳を目指しました。

質疑応答では、翻訳書の編集方針をめぐる議論がなされ、講演会終了後の会場からは、「コアな研究会でしたね」という言葉が漏れ聞こえてきました。

講演会にご参加いただきました皆様に、あらためまして心よりお礼申し上げます。

この講演会をもとにした、小林先生の特別寄稿「矢崎源九郎の業績とその特徴―デジタル化された資料の調査をもとに―」が『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集 27』（二〇二四年三月発行）に掲載されています。

白百合女子大学図書館の学術機関リポジトリでも閲覧することができま



もっと知りたい!

台湾の児童文学・文化事情

台湾在住の構成員、劉冠玫さん

台湾在住の構成員、劉冠玫さんの研究ノート『台湾紙芝居』の一觀察「2018年以降を中心に―」（『紙芝居研究』第七号、紙芝居研究プロジェクト発行）は、台湾紙芝居の動向をまとめることを通じ、その独自性を浮き彫りにした力作です。ある朝、この論考を熱心に読んでいたセンチメンタル助手が、だしぬけに叫びました。

「台湾の児童文学・文化について、もっと知りたいです!」
そこで、劉さんに現代台湾の児童文学・文化事情についてご寄稿をお願いしました。

台湾の児童文学・文化事情

劉冠玫

台湾の児童文学・児童文化というと、皆様はどのようなことを連想するでしょうか。台湾の児童文学を考えると、原住民族や日本統治時代の影響、台湾独自の台湾文学などをとらえる必要があります。また、台湾は、複数の言語を持つ、様々な文化が共存している「多言語・多文化」社会であるので、台湾オリジナルの児童書のテーマも多彩で、原住民の伝説や台湾の民間伝説などがあります。しかし、台湾オリジナルの児童書の発展には困難がありました。前述したように、様々な影響を受けた国であるため、海外の作品が高く評価される傾向にあり、日本・英米などの児童書の輸入や翻訳出版が台湾全体の児童書出版の七割を占めていた時期もありました。二〇〇〇年代に入り、政府も出版業界も台湾オリジナルの児童書の発展をより重要視

するようになりました。近年、イタリアのボローニャ国際絵本原画展で台湾の絵本作家がしばしば入選しているのもその成果の一つと思われま

す。近年、台湾の児童文学・児童文化において見逃せないことは、各地方自治体が読書推進に力を入れており、特色ある図書館が次々と生まれているということでしょう。海外の有名建築家による建築物のデザインからインテリマでさまざまな工夫が凝らされているので、図書館自体が大人気の観光スポットになりました。さらに、新築された図書館では、今までの図書館と違い、子ども向けに特化したエリアができました。例えば、高雄市立図書館本館（二〇一四年）の地下一階には「国際絵本センター」があり、十二万冊の国内・海外の絵本が所蔵されており、四〇〇席あるミニシアターも併設されています。また、桃園市立図書館新本館（二〇二二年）の三階にある「子どもフロア」には、国内外の児童書が所蔵されています。そのほかに、台中市の国立公共資訊図書館（二〇二二年）の一階に「児童学習センター」があり、児童書の所蔵に加え、AR体験コーナー（二〇二三年にリニューアル）までもあり、子どもたちを読書に親しませるための、様々な努力がみられました。中でも、最も期待されているのは、台中市立図書館新総館である「台中緑美図」（二〇二五年にオープン予定）です。政府の広報によると、対象年齢によって図書館の建物に分けるというデザインとなっており、今までにない図書館体験ができるそうです。

このような図書館ブームの中で、台湾初の、台湾マンガ文化を保存するための「国家漫画博物館NTMC」（二〇二三年）及び、台湾初の絵本図書館である「斗六市絵本館」（二〇〇九年にリニューアルオープン）も生まれました。前者は、日本統治時代の建築物群を活用した、新たな文化発信基地です。それに対して、後者は台湾で初めて子ども

のためにデザインされた絵本館であるため、カラフルなお城の外見をしており、五万冊を超える児童書を所蔵しています。

近年、新築された台湾の図書館では、子ども向けに特化したエリア以外にも、地域のニーズに合わせて、青少年のみが利用できる「レンタルダンスルーム」が併設されています。台湾の図書館ブームを観察したことで、図書館は社会の変化や時代と共に変化していくものと再び実感しました。一研究者として、今後どのような変化をしていくのかを楽しみにしています。

〔研究員〕

新任の先生の紹介

二〇二四年四月、山中智省先生が児童文化学科に着任されました。今号では、山中先生にご寄稿をお願いし、自己紹介をしていただきます。

議論や交流の場を創出することの大切さ

山中智省

今年度より児童文化学科に着任いたしました山中智省です。専門は日本の近現代文学、サブカルチャー研究で、とりわけ「ライトノベル」と呼ばれる若年層向けエンターテインメント小説の研究に取り組んでいます。大学院では、ライトノベル、少女小説、ライト文芸、児童文庫など、若年層を小説(活字)の世界に誘うべく誕生・発展を遂げてきたエンターテインメント作品について学ぶ「児童文学特

殊研究 A・B」を担当中です。

ライトノベルに興味を持ったのは学部生の頃で、ゼミの指導教員である一柳廣孝先生にお誘いを頂き、新設の「ライトノベル研究会」に参加したことがきっかけでした。そして、異様な(笑)熱気と熱意にあふれた同研究会に身を置きつつ、他大学の先生方や学生の皆さんとも議論や交流を重ねるなかで、ライトノベルに対して強い魅力と探究の面白さを感じた結果、現在に続く研究のモチベーションを抱くようになりました。

他方で、当時のゼミでは授業とは別に、院生・学部生の有志が参加する自主ゼミが開かれており、テリー・イーグルトン『文学とは何か 現代批評理論への招待』、フランク・レントリツキア／トマス・マクローリン編『現代批評理論 22の基本概念』などの理論書や各種論集を対象に、協働で内容の読解に挑戦していました。この自主ゼミは、研究に必要な概念や方法論を理解することに加えて、ライトノベルを含むサブカルチャーを研究する意義について考えていく上でも、大変有意義であったことは間違いありません。

今ふり返れば、このような議論や交流の場を学生時代に持てたからこそ、研究のやりがいや楽しさ(無論、苦勞もですが)に気づけたのだと思います。そして、研究の目的や興味関心を同じくする者同士で意見を交わすこと、切磋琢磨し合うことの重要性を、強く実感する機会にもなりました。私の経験則にはなりますが、学内・学外を問わず、議論や交流の場に積極的に参加することは、研究に資する糧を掴む大きなチャンスになり得ますので、特に児童文学専攻に所属する院生の皆さんには、ぜひ実践を試みて頂ければと思います。なお、私も現在、現代日本のメディアミックスをテーマとする研究会を定期開催していますので、もしもご興味がありましたら、お気軽にお声がけください。

さて、白百合女子大学の院生の皆さんとは、お会いしてからまだまだ日が浅いものの、授業に真摯な姿勢で臨み、個々の意見をしっかりと練り上げて発信されている姿などが、当初から大変印象的でした。研究に取り組む上で必要になるこうした力を存分に発揮し、ひいてはその力をさらに伸ばしていけるよう、私も試行錯誤を重ねつつですが、授業等を通じてサポートしていきたいと考えています。そして、皆さんにとって有益な議論や交流の場を、言い換えるなら、研究者として成長するきっかけとなるような機会を、少しでも多く創出できるように努めていく所存です。どうぞよろしく願います。

〔本学准教授・所員〕

富田文庫ポスター資料目録・

光吉文庫カード資料目録

児童文化研究センターの貴重書庫、通称三文庫(金平・富田・光吉)のうち、富田文庫と光吉文庫につきまして、二種類の資料目録をご紹介します。

〈富田文庫ポスター資料目録〉

児童文化研究センター三文庫のひとつ、富田文庫では、児童演劇に関連する資料を多数所蔵しております。

昨春秋、センターに保管されていた富田ポスター資料の目録データを整理いたしました。センター内の閲覧用デスクトップパソコンでエクセルのデータを閲覧・検索することができます。また、データをプリントアウトした、紙のリストもご利用いただけます。

富田文庫のポスター資料は、演劇に関連する国内外のポ

スターを中心に、肉筆の絵画作品や、額装して飾るための複製画や復刻版ポスター集などと合せて、約四七〇点の資料で構成されています。ポスターに書かれている言語は日本語だけでなく、ロシア語、英語、デンマーク語、クロアチア語など様々です。「青い鳥コレクション」のコーナーを有する富田文庫のこと、もちろん「青い鳥」のポスターも見ることができます。

富田文庫は、児童演劇関連のチラシやプログラムといったエフェメラ資料も所蔵しており、富田ポスター資料もまた、富田文庫を特徴づけるそれらの資料のひとつです。ポスターは宣伝や告知の役割を終えると本来ならば廃棄される運命にあるのですが、インパクトの強い画面構成やタイポグラフィに魅了される人も少なくありません。

また、最近では、横浜人形の家に二〇二三年十月二二日より十一月十五日まで開催された「現代人形劇の100年展」に、富田文庫が所蔵するポスター資料（人形座「操り人形 人形劇第一回上演 誰がいちばん馬鹿だ」）が使用されました。同展は、滋賀県の人形劇の図書館が企画し、一般社団法人日本人形玩具学会と横浜人形の家が主催したものです。

〈光吉文庫カード資料目録〉

同じくセンター三文庫の一つである光吉文庫のカード資料目録につきまして、利便性を高めるため簡易検索用にエクセルデータを作成いたしました。詳細検索用のデータと同様、センター内の閲覧用デスクトップパソコンでご利用いただけます。

近年、図書館ですらカード目録を使う機会は稀ですが、光吉文庫の元の所有者、光吉夏弥氏は、書誌情報をタイプライターでカードに打ち込み、情報を整理していました（当時の様子につきまして、澤田精一氏のご講演「光吉夏

弥―その生涯と時代」のなかで触られています。ご興味のある方は二〇一九年三月発行『児童文化研究センター研究論文集22』の講演録をご覧ください。

この情報カードについて、文庫整備の前任者で元センター助手の金子真奈美さん（研究員）が「光吉氏が日本に紹介し、今なお版を重ねている数々の絵本のいわば『maotrix』」（科研費作業終了報告）『センター報』第46号）と述べていらっしやいました。光吉の情報カードは、岩波の絵本シリーズをはじめとする、戦後日本の絵本文化を研究する上で、欠くことのできない資料です。

富田文庫・光吉文庫の整備にあたり、学内外の多くの方々にご助力いただきました。改めて感謝申し上げます。

富田ポスター資料目録および光吉カード資料目録は、センター内でのみ閲覧・検索していただけます。また、ファイル資料（富田文庫および光吉文庫）を除く、そのほかの貴重書は、白百合女子大学図書館ホームページ「白百合女子大学学術リソース」の「児童文化研究センター文庫検索」で学外からも検索していただけます。三文庫のご利用の詳細につきましては、児童文化研究センターホームページをご覧ください。皆様のご利用をお待ちしております。

プロジェクト活動報告

児童文化研究センターでは、センター構成員による研究の促進を目指し、プロジェクト制度を設けています。二〇二四年度は、次の六つのプロジェクトが活動しています。プロジェクトへの参加を希望される方は、センターまでお問い合わせください。

小波日記研究会（小波日記を読む） （研究代表 猪狩友一）

巖谷小波日記（センター所蔵の複写資料）の翻刻・研究を継続しています。およそ月一回のペースで研究会を開き、主に日記本文（くずし字）の解読と翻刻案の確認・修正を行っています。対面とオンライン（Zoom）を併用しており、どちらでも参加できます。現在明治四十年あたりを読んでいます。この頃の文学・文化に興味がある方なら、どなたでも歓迎します（くずし字が読めなくてもOK）。国語国文学専攻の院生も参加する場合があります。新規で参加する場合は、猪狩までメールで申し込んでください（メールアドレスは児童文化研究センターにお尋ねください）。研究会の開催情報や参加方法をお知らせします。

近現代児童詩歌研究

（研究代表 宮澤賢治）

本プロジェクトの活動成果をまとめた『児童詩歌』は、十九号となりました。「竹久夢二『京人形』に関するノート」は、表題に「絵ものがたり」の角書が付された詩画集『京人形』を概観して、作品の核となる少女の姿の特徴やイメージについて考察しています。「中川ひろたかの「あそびうた」研究（八）」は、『とんぼ&ビーマンのあそびうたクラブ』の初出となる「保育の友」誌での活動とCDブックの形態に注目しながら、作品の特質や魅力の要素について論じています。

今年度も新規メンバーの加入がありましたので、近現代の児童詩歌へのアプローチがより多彩になるのではないかと期待しています。そして『児童詩歌』の序文に記載の「子どもの詩歌研究にもっと光を！」と願っています。研究会

開催の時期や手段は、適宜検討して進めて参ります。

紙芝居研究

(研究代表 浅岡靖央)

二〇二三年度は、うれしいことに昨年度に続いて新メンバーが加わり、定例の研究會も、五月・六月・七月・十月と、計四回開催できました。各回、メンバーが、興味深い紙芝居作品を実演したり、紙芝居に関する研究を発表したり、紙芝居に関する情報を持ち寄りしています。『紙芝居研究』第七号も、二〇二四年三月に無事に刊行できました。紙芝居研究會は、紙芝居に関心のある方や、紙芝居を楽しみたい方であれば、どなたでも、見学・見物だけでも、いつでも、一回だけでも、大歓迎いたします。

ちりめん本研究

(研究代表 間宮史子)

本プロジェクトは大学図書館所蔵のちりめん本について研究することを目的としています。各自がテーマを設定して研究を進める他、メール等で情報交換をしています。昨年度は、尾崎るみさんが『児童文化研究センター研究論文集27』に「B. H. チェンバレン『ローマ字日本語読本』研究―ちりめん本『欧文日本昔噺』シリーズ『松山鏡』および『因幡の白兔』との関連を中心に―」を、柏村裕子さんがセンター構成員のマリア・エレナ・ティシさんと共に研究ノート「イタリア語ちりめん本について」を発表しました。柏村さんは、スウェーデン王立図書館でちりめん本を閲覧する機会にも恵まれました。本年度も各々のテーマで研究を進めます。参加条件はありませんがスペイン語等が得意な方を歓迎します。

「神宮輝夫先生のお仕事を振り返る」研究会

(研究代表 白井澄子)

一九九五年から二〇〇二年まで本学教授を務められた神宮輝夫先生の業績を振り返ることを通して、日本における児童文学史および研究史の一面を検証し、我々が「引き継いでいくべきこと」と「乗り越えていくべきこと」を明らかにするためのプロジェクトです。昨年度は、「評論」「翻訳」「研究」の三グループに分かれて、各領域での先生のお仕事について検証してきました。今年度はそれらを文章化しまとめたい予定です。

絵本研究會

(研究代表 水間千恵)

昨今、美術館や博物館等での絵本展ブームに触発され、営利・非営利を問わず、図書館や託児施設以外の場所でも絵本書架の設置や絵本展示が行われることが増えています。本プロジェクトは、このような活動を支えるための専門的知見の開拓を目指して、調査・研究を行います。まずは、一〜二か月に一回程度の研究会を通して、絵本学の基礎知識を共有するところから始めます。

センターからのお知らせ

講演会のお知らせ

来たる七月二七日(土)、「第七二回 白百合女子大学 児

童文化研究センター研究会」といたしまして、元本学教授(現非常勤講師)でカナダの児童文学がご専門である白井澄子先生をお招きし、講演会を開催いたします。タイトルは、「TVシリーズ『アンという名の少女』の挑戦」です。

参加をご希望の方は、七月二五日(木) 12時までに、メーリングリストまたは児童文化研究センターホームページに記載されたフォームより、お申し込みください。定員に達しましたら、締め切らせていただきます。

会場等、講演会の詳細は、児童文化研究センターホームページでご確認ください。

先生方の「近著、ご講演等

二〇二三年六月から二〇二四年五月までに刊行された、センター所員の先生方のご近著(訳書・編纂などを含む)およびご講演、携わられた展示等をご紹介します。

単行本

○渋谷区立松涛美術館編著『私たちは何者? ボーダレス・ドールズ』青幻舎、二〇二三年七月(菊地浩平先生「寄稿」)

○子どもに本を手渡す・児童文学基礎講座「国際子ども図書館児童文学連続講座講義録、令和四年度、国立国会図書館、二〇二三年九月(水間千恵先生講義録)

○ビーター・S. ビーグル『最後のユニコーン 旅立ちのシーズ』井辻朱美訳、早川書房、二〇二三年一〇月
○甲賀秀二さく・やたみほえ『あかいてぶくろ(チャイルドブックアップル傑作選 vol. 21・9)』チャイルド本社、二〇二三年一二月

○小野寺敦子編著『恋愛を学問する…他者との関わり方を学ぶ』二〇二四年一月刊行(山中智省先生「共著」)

○『横浜人形の家 企画展 ひととはなぜ“ひとがた”をつくるのか』丹青社、二〇二四年五月（菊地浩平先生）寄稿

雑誌記事

○山中智省「耳で聴く本」を謳うオーディオブック探訪記―一九八〇年代のカセットブック』『近代出版研究』第三号（皓星社、二〇二四年四月）

○森下みさ子「基盤としての『おもちゃ』」『月刊 子どもの文化』通号六三二号、二〇二四年五月号

○浅岡靖央「書評『高橋五山の総合的研究―デザイン・絵雑誌 紙芝居―高橋洋子著 風間書房（2024）』

『月刊 子どもの文化』通号六三二号、二〇二四年五月号

講演

○山中智省「ライトノベル入門講座―若い読者を小説に誘う『ビジュアル・エンターテインメント』の世界―」、中野区立上高田図書館、二〇二三年一〇月二八日

展示

○中野区立上高田図書館・目白大学新宿図書館コラボレーション企画「ようこそ!! ライトノベルの世界へ」中野区立上高田図書館、二〇二三年一〇月三〇日～一一月三〇日（山中智省先生監修）

○「ひととはなぜ“ひとがた”をつくるのか」横浜人形の家、二〇二四年四月六日～六月三〇日（菊地浩平先生展示協力、「いま・このひとがた」ご担当）

展示につきまして、こちらに挙げたもののほかに、二〇二三年度より、ヒルトン東京お台場にて絵本の展示がこなわれております。

絵本展示

期間 通年（季節ごとに展示替えあり）

時間 六時三〇分～二時

場所 ヒルトン東京お台場二階 ライブラリー

スペース

この展示では、本学児童文化学科の学部生が主体となって選書・ポップ制作・展示レイアウト考案・配架作業などをおこない、水間千恵先生が学生の指導・ホテル担当者との連絡・取りまとめをされています。センタープロジェクトの絵本研究会でも、研究活動の一環として展示をサポートしています。

こちらの絵本展示の様子は、ヒルトン東京お台場のウェブサイトににてご覧になることができます。「ヒルトンお台場 絵本」で検索してみてください。同ウェブサイトには、参加学生の考えた選書方針が、「白百合女子大学児童文化学科よりメッセージ」にまとめられています。素敵な選書方針ですので、ぜひご覧ください。

センター論文集の特別寄稿が受賞

『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集 26号』（二〇二三年三月）に収録された、沼辺信一氏（絵本蒐集・研究家）の特別寄稿「光吉夏弥旧蔵のロシア絵本について」が、二〇二四年六月八日、絵本学会主催第五回絵本研究賞を受賞しました。受賞論文は、二〇二二年三月二十六

日開催の児童文化研究センター第六五回研究会「沼辺信一氏講演会 光吉文庫のロシア絵本について―コレクションの稀少性と歴史的意義」をもとに、新たに執筆いただいたものです。日本におけるロシア絵本の受容史に始まり、光吉文庫のロシア絵本全六一点を紹介・分析、雑誌『生活

美術』一九四三年九月号の「絵本特輯」に掲載された光吉の論考「絵本の世界」におけるロシア絵本に関する記述を読み解いたものです。光吉のロシア絵本論の「種本」の存在までもが明らかにされる、密度の濃い論文です。

センター研究会

児童文化研究センターでは、「児童文化研究センター研究会 前期/後期 発表会」といたしまして、「大学院生研究会発表会（博士論文構想発表・修士論文中間発表/修士論文発表）」と「構成員研究発表」を前期・後期に分けて行っております。詳細は児童文化研究センターホームページやメーリングリストなどお知らせいたします。

X運用開始

二〇二四年度より、児童文化学科研究室と共同アカウントで、X（エックス）の本格的な運用を開始いたしました。定期的に投稿して参りますので、アカウントをお持ちの方は、ぜひフォローしてください。

センターブログにつきまして

児童文化研究センターには、公式ブログがございます。通称は、「センターブログ」です。本センターからの情報発信に加え、構成員の皆様による投稿（児童文学・文化関連の新作書・映画・展覧会・講演会の感想・紹介など、児童文学・文化に関わること）を募集・掲載しております。ご興味のある構成員の方は、どうぞお気軽にセンターまでお問い合わせください。

ブログ：<https://jido-bun.blogspot.com/>



センター構成員一覧

(二〇二四年七月現在・敬称略)

委嘱研究員

木村八重子 竹田修
増田珠子 横田順子

研究員

安達愛 石元みさと 伊藤かおり 奥田富美
尾崎るみ 金子真奈美 岸野あき恵
小林夏美 佐々木江利子 佐々木裕里子
沢崎友美 志村裕子 鈴木あゆみ 鈴木宏枝
鈴木律子 陶山恵 ティシ、マリア・エレナ
中川理恵子 永島憲江 浜名那奈
半田涼太 松村裕子 宮崎麻子 八代華子
山本麻里耶 劉冠玟 和田啓子

準研究員

高島香

院生(博士課程(後期))

伊藤かの子 孔阳新照 沼本知自
原田優香 深見けいと 三井彩愛

院生(博士課程(前期))

相原彩乃 秋森玲香 天野洗帆
織田彩乃 中島瑞貴 平川穂香
松本唯 山中芹菜

* 事前に電子公開の同意を頂いた方のお名前を掲載しております。

* センター構成員は、右に記した方々の他に、研究員二名

準研究員一名、院生(博士課程(後期))一名、院生(博士課程(前期))一名が在籍しております。

編集後記

今年度よりセンター報は完全電子化し、紙媒体での発行は終了とさせていただきます。限られた予算での事業継続のため、ご理解いただきますようお願い申し上げます。

今号は、構成員の劉冠玟さんと、新任の山中智省先生にご寄稿いただきました。ご執筆、ありがとうございます。劉さんのご寄稿は、公共図書館という身近な存在に焦点を当てたもので、ますます興味が尽きません。山中先生のご寄稿に登場する一柳廣孝先生は、日本近現代文学・文化の研究者で、『怪異の表象空間・メディア・オカルト・サブカルチャー』(二〇二〇年)などの著書をお持ちの方です。

「センターからのお知らせ」にあります通り、今年度のセンター主催講演会は、白井澄子先生のご講演です。二〇二一年三月のご退職の折には、新型コロナウイルス感染症流行のさなかということもあり、白井先生の最終講義は行われませんでした。このたびご講演いただけることとなりました。皆様どうぞご参加ください。

児童文化研究センターは、児童文学・児童文化研究者の皆様の研究・発表・交流の場として、事業の維持と益々の充実を図って参ります。今後とも、変わらぬご指導とご厚誼を賜りますよう、お願い申し上げます。

(酒井・宇佐美・遠藤・若谷)

児童文化研究センター夏期閉室期間

七月二八日(日)～九月一九日(木)

* 右記の日程は変更することがございます。ご了承くださいます。

* 後期は九月二〇日(金)より通常開室いたします(午前九時～午後五時)。

『白百合女子大学児童文化研究 センター研究論文集 28』原稿募集

児童文化研究センターでは、児童文学・文化研究の活性化を目的として、年に一度、研究論文集（査読制）を発行しています。今年度も、以下の要領で『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集 28』（二〇二五年三月発行予定）の原稿を募集いたします。

締切

二〇二四年九月二五日（水）正午必着

提出物

- ① 表紙、論論文題目、氏名、構成員の身分、郵便番号、住所、メールアドレス、文字数、投稿区分（研究論文／研究ノート）、申告事項（あれば）を記載
 - ② 本文（参考文献、注、図、表等を含む）
 - ③ 論文要旨（300 字以内、論文題目を併記）
- 以上、①～③について、プリントアウト各一部及びデータを提出すること。

提出先

〒一八二一八五二五

東京都調布市緑ヶ丘二一二五

白百合女子大学 児童文化研究センター 宛

データの送付先

<endo@shirayuri.ac.jp>

研究論文集担当 遠藤知恵子

審査規定（センター規定より抜粋）

- ※ 研究論文集審査のための編集委員会を設置する。
- ※ 編集委員は所長が依頼した、本学専任教員またはそれに相当する者から構成される。

投稿規定

※ 投稿原稿は編集委員会の審査を経て、許可されたものが掲載される。

一 執筆者は原則として児童文化研究センター構成員とする。

二 児童文学・文化に関する研究論文、研究ノートを対象とする。

【研究論文】先行研究に加えるべきオリジナリティーのある研究成果が明確に述べられているもの。

【研究ノート】資料の紹介・精査、論点・仮説の予示、既存の仮説の検証作業、研究の中間報告等、優れた研究につながる可能性のある内容が明確に記述されているもの。

三 投稿に際して、審査を希望する投稿区分を明記する。ただし、審査結果によって、区分は変更されることがある。

四 表紙、本文、論文要旨はマイクロソフト社のワードで提出する。

五 本文のフォントサイズは 10.5 ポイント、用紙サイズは A4 判、文字数と行数は 40 字×30 行となるように設定する。縦書きの場合、用紙の向きは横とする。本文の枚数は 20 枚以内とする。

六 参考文献及び注は本文末に一括する。

七 ページ番号を本文の中央下に付す。

※ 書式の細部については *MLA Handbook* 最新版及び過去の研究論文集を参照し、特に欧文文献を引用する際は *MLA Handbook*

八 本誌に掲載された著作物の著作権は著者に帰属する。当該著作物は、「クリエイティブ・コモンズ表示 非営利・改変禁止 4.0 国際 (CC BY-NC-ND 4.0) ライセンス」及びその後継版のもと、白百

合女子大学学術機関リポジトリで公開する。なお、執筆者がその他のクリエイティブ・コモンズ・ライセンスの選択を希望する場合は、原稿採用後に、その旨を「学術機関リポジトリ「内容記述」記載データシート」に記載すること。執筆者が当該許諾に同意しない場合は、その旨を「学術機関リポジトリ「内容記述」記載データシート」に記載すること。その意思表示のない場合は、同意したものと見なす。

審査結果発表

二〇二四年十月中旬

注意事項

- a. 完成原稿を投稿する。
- b. 原則として、数字は、横書きの場合は半角英数字、縦書きの場合は漢数字を用いる。いずれの場合も半角カタカナを使用しない。
- c. 特殊記号、飾り文字、不必要なスペース等をなるべく使用しない。
- d. 図版を掲載する場合、引用要件を満たし、出所を明示する。
- e. 画像は鮮明なものを使用する。高度な印刷技術が必要とする場合は、実費自己負担となることもある。
- f. 学会等で口頭発表したものを投稿する場合は、その旨を本文末に記載する。
- g. やむなく投稿規定を逸脱する場合は、その旨を表紙に記載して申告する。その内容は編集委員会で審議される。
- h. 採用した原稿についての著者校正は初校、再校のみとする。著者校正での誤字脱字以外の加筆修正は原則として認めない。
- i. 不明な点については、研究論文集担当者に問い合わせの上確認する。